

《座談会》

外国人からみた  
日本文化の諸相

出席者 (ABC 順)

高等学校教諭 Jeffrey L. Berglund

大学文学部教授 Otis Cary

大学文学部教授 Beverley D. Tucker

大学文学部嘱託講師 Mary E. T. Williams

(司会) 深田 未来生

(大学神学部教授)

日本文化の内側と外側

深田 きょうは「外国人からみた日本文化の諸相」ということでお話しいただきたいと思うのですけれども、外国人と申しましても、皆さんのおの日本の生活が非常に長く、典型的な外国人と思えない、あるいはみることができないように思えます。それで初めにすこし自己紹介を兼ねて、どのぐらい日本においてになるのか、あるいはどういうようなことをなさっていて、というようなことから出発して、日本の文化というようなことに入っていきたいと思います。私は一九六〇年にメソジスト教会の宣教師として京都へ来ました。香里中高を二年教えてから神学部に関係するようになり一九六六年に専任になりました。生れはアメリカですが少年時代は日本ですごしました。ですから、アメリカと日本を両方とも母国と考えています。

さて、お話に入りますが、やはりケリー先生からがいちばんいいのじゃないかと思いがすが。

ケリー レディース・ファースト(笑)。

深田 じゃミセス・ウィリアムズからお話



し願いたいと思います。

ウィリアムズ 私は戦後わりあいにくぐ、昭和二五年に参りましたが、東北のほうにいちばん初めに行つて、そして高等学校、中学校、大学で最初英語だけ教えたのですけれど、日本に参りますとき赤ちゃん連れてきましたから、近所のおつき合いも多かったのですが、昭和二六年から二八年まで二年間、日本語の勉強で京都に来ました。あとは大体ずっと仙台でした。日本の文化を勉強するために京都に参りましたが、やはりよかったと思えましたね。京都へ来ることよって、昔々の日本とか、いろんな伝統的なことがわかるようになりました。何時も英語を教えるようにまされるので、日本語はまだまだ下手だけれども。

深田 バーグランド先生、どうぞ。

バーグランド きょうはいちばん若くて：。京都へ来て二二年目です。最初同志社大留学で昭和四四年から来て、四五年の九月、二学期から同志社高校講師として英語を担当して、五年前から専任になりました、ことし宗教部主任をまかされております。

タッカー 私は昭和二八年に日本へ参りま

したんですけれども、じつは生まれたのは上海でした。それでも中国人ではないし、日本人でもないです。またアメリカへ行つても、アメリカはなにか外国みたいな感じがあります。アメリカはわずか中学校と高等学校がだいたいわんざう、そして大学の時代と神学部の時代も六年、そして休暇はときときアメリカへ行きましたが、まあだいたい一五年間ぐらいアメリカに滞在したことになります。あとは中国二二年間、日本は二八年でしょうか。ですけど、ほんとは故郷がない者ですね。ことしの夏、中国へ行ったら、もう中国語は全然だめで、ですから私は故郷がない者です。

ケーリ 私は日本に参つたのは大正一〇年でございます。というのが日本で生まれたわけなんです、日本といつても北海道ですけれど、それでタッカーさんと同じように高等学校、大学をアーモストにいつて、その最中に戦争になりました、日本関係——日本の捕虜を真珠湾でいろいろ世話しろということ、それを四年近くやりまして、そして戦争直後、日本に進駐軍の一人として命ぜられて半年ばかりおりまして、帰って大学を片づけ

て、大学院をやりだしたところ、同志社にアーモスト大学から行かないかということ、三四年前の昭和二年に同志社にやってきたわけです。それからちよいちよいアーモスト大学へ教えるために帰ったり、あるいはまた勉強休暇をいただいで、それをやったりしておるわけですが、だいたいそんなことで、ちょうどことして選暦になりましたんですが、その四分の三ぐらいを日本で過ごしているという、そういうような経歴であります。

深田 いまお話をおうかがいしてますと、さきほど申しましたように典型的な外国人というふうに考えられない方々ですけれども、それでもやはりおのおのが持っている西歐文化の背景というものがありますし、ちよ



オーティス・ケリー氏

うど文化のはざまというか、文化と文化の間

に生きている、あるいはわれわれ一つの文化のなかにおいても、いろんなサブカルチャーというか、文化の波のなかに生きているわけですから、そういうことを前提としてすこしお話をしていただきたいと思うのです。

とくに日本の文化というものの、たとえば言葉にしても、風俗にしても、習慣にしても、感覚的なものにしても、われわれが毎日の生活のなかで接しているもの、あるいは無感覚になっていくものなかに、やはり西歐文化との比較でみた場合に、特異なもの、ユニークなものというのがあると思うのですね。皆さんそういう日本の生活の真ただ中に暮らしていらっしゃるわけですから、あまり新鮮な形でそれをとらえることができないかもしれませぬけれども、最近の生活のなかからどういうようなことをお感じになつていくのか、そのあたりから話を進めていただいたらいいと思うのです。いかがでしょうか。

バーグラント 約三週間前、滋賀銀行の経

理研究会から「外国人からみた日本の文化」という講演を頼まれて、ぼくはむずかしい話になると日本語ができませんから、むずかしい話をやめて、日常生活のなかでの日本文化というか、ぼくはアメリカのダコタ州に生まれて、海をはじめて見たのが二十、大都会に入ったのが二十、それまで日本のことを全然知らなくて、ほかの国のことも全然知らなくて、日本に来ておふるがちがう、便所がちがう、食べるものがちがう、もちろん言葉もちがう。日米関係の経済状況が何とかなんとか、そういう話が出るとね、日常生活のなかでのちがうところを理解できない人間には、そのもっと大きな問題の解決法もわからないというふうに思ってきました。

ぼくは、食べるものは二年ぐらい、おふるは五年ぐらい、言葉は一〇年でやっと自分の言いたいことを言うようになったんです。いま年の終わりですから、ちょうどクリスマスとお正月がくる。いまままで一二月二五日、クリスマスのほうがよくにっしてはずっとお正月より大きかったですけど、ことし初めてお正月のほうが楽しみ——食べるほうと飲むほうを考えて。だんだん日常生活を通じたら、すこし日本の文化がわかったような気がするのです。だから、もっとむずかしい長い歴史とか、伝統的なものとか、そういう話し



ジェフリー・L・  
バーグランド氏

やなくて、日常生活のなかでの日本の文化と  
いうのかな。

たとえば日本人が話をすると、よく「われわれはこういうふうに思います」、アメリカ人は話をすると「われわれは」という言葉あまり使わないで、「ぼくはこういうふうに思う」と。銭湯へ行くと、わりあいおふろの入り方はみな同じような入り方です。アメリカ人は朝シャワーを浴びる人もいるし、仕事から帰ってきてからシャワーを浴びる人もいるし、ふろをつかう人もいるのです。その日常生活のなかで、日本では共通点がすごく多い。言葉にしても、毎日同じ言葉を使う場合が多いんです。「行ってらっしゃい」「行ってきます」というのは英語で何て言うのですかと生徒にきかれたら、英語にはきまらなかった言葉

はありませんと答えます。ぼくは、アメリカで大きくなって二十で日本に来て、いちばん目に入ったのは、日本の文化というのはわりあいどこへ行っても同じような日常生活をしているということですね。

深田 アメリカの生活のほうが多様性があるということですね。

ウィリアムズ 私、第一にちがうのは、このごろ非常にきびしく感じているのですけれども、外人はいつまでも外人です、日本では。どんなに長くいても、ケリー先生でも外人です。アメリカ人の考え方は全くちがうんです。なるべくアメリカ人になるように、どんな外人でもそういう心がけを期待している。ベトナム人とか、ヨーロッパ人とか、アメリカに入ったらみんなたぶんアメリカ人になりたいし、アメリカ人になるように、なるべく外人の扱いをやめて、「留学生」という時は、フォーリン・ステューデントでなしにオーバシー・ステューデントとか、インターナショナル・ステューデントなど、いろいろな言葉を使うように工夫しています。

外人の日本観——ですから私たちは日本人になるようにとは全然考えていません。ちょ

っと強い言い方かもしれませんが。

深田 ということは、本当の意味で日本文化のなかに溶け込むということはむずかしいということですね。

ウィリアムズ 私、東北では、すっかり溶け込んでしまったとよく周りの人に言われたんですけども、ちょっと自分の近所を離れると、とくに京都ではね、「お箸、上手ですね」と、私が日本に三〇年いるとわかっていても、上手ですねと言うでしょう(笑)。何だか……。食べ物も納豆が好きと言ったら、おかしいとむこうは考えている。私たちアメリカでは、外人に対してアメリカのものを食べるのはあたりまえと思えますけれども。

深田 ということは、日本の文化のなかの内側と外側というのがいつも存在している。なかなか外側が内側に入ってもこれない。内側もなかなか外側に出て行けないというような面があるかもしれませんね。

ウィリアムズ 韓国人もそうだと思います。

バーグランド ケリー先生もまだ外人と言われますか。

ケリー もちろん。ぼくは逆立ちしても日



メリー・E・T・  
ウィリアムズ氏

本人になれませんか、べつになろうとも思いません。また、なりたいとも思いませんね。それはしかし、ときどき聞かれますね。ただ、自分でしっかり考えて、もうこれでいかなきゃならないというふうなところまで、ちゃんと理屈立てたわけじゃないんですけれどね。よく日本の君と結婚している外人の女の子がですね——私の三人の娘のうち、二人も日本人と結婚しているんだけど、これは別として、なにかそんな人から相談受けたりします。私が日本で生まれて長いから、自分らの問題から、私のようなベテランというんですか、のようなのに聞くことが、溶け込み方のむずかしさ、何年かかるのですかというふうなことだけれど、パーグランド君は逆に日本の美人と結婚しているわけなんですけれど、

ど、私は何となしに無意識に実行していることは、全然日本人になりきってしまったというのを遠い前に捨ててしまっているんですかね。なるうとも思いません、なれませんか。それだけ異質であるというところももちろんあるんですけど、ある意味で割り込みにくい文化でもありますね。あるいは、それほど独特の文化であるとも言えるのじゃないでしょうかね。それだけ密接に組まれているから、入って行く余地がないというふうな言い方もできると思うのです。それはべつに日本文化が悪いんじゃないんです。でも二〇〇〇年の歴史も持っていてこうなっちゃって以上はですね。私が得していると思うのは、入らしてもらった程度に入れさせてもらって、それでもう納得してありがたいと思っているのです。もともとと、どうしても日本人に日本人にという重荷を背負っているならば、だいぶノイローゼになるのじゃないかと思えますのですけどね。

深田 いま内と外というか、そういうことをお話しただけでいるわけですけど、それでも考えようによっては、日本の文化というのはほとんどん外側からいらんなものを取り入

れ日々変わっていく文化だと思っんですね。それでいて一種の排他性というか、エクスタシーシブネスというか、非常に固定したものが文化のなかにある。いまケリー先生のおっしゃっているのは、無理してそういうなかに入り込もうとする努力そのものが不毛であるというお話だったと思うのですけれども、タッカー先生いかがでしょうか。

タッカー 表面的に日本の文化を十分取り入れることができますけど、たとえば私たちのうちは、たいてい同志社の学生のうちよりも畳の部屋が多いし、ちゃんと日本のおふろがあります。掛物もあるし、いろいろな点で日本人の学生が私のうちに入ったら、やあ、これは私のうちよりも日本的と言っんですよ。私たちは日本のこういう目に見えるものを好んで、畳もこたつもありますし、あるいは歌舞伎とか、日本の美術とか、そういうことは好きですから自分の生活のなかに入れますけど、しかし文化の心はそういうものではなくて、長い歴史と言葉のなかにありますから、そういうところに入りにくいと思います。

歴史を勉強することはできますけど、しかしたとえば、ときどき連想ゲーム見るときそ



ピバリー・D・  
タッカー氏

したらある言葉はわかりますけれども、しかし大部分は、たとえばいろんな歌とか、いちばんわかりにくい言葉は、ワンワン・コーナ―ですか、そういうような言葉は全然わかりません。やはり言葉の問題が非常に大きいです。私はだいたい普通の日常の会話のことわかりますけど、しかし冗談聞きますと、ちょうどいちばん大切なところわからない。だからつまらないですね(笑)。

ウィリアムズ 自分で冗談言おうと思っていても、みんなわからない。

タッカー ですからいちばん大切なことはわからないのですが、ぼくはべつに日本人になりたいという気持ちがありません。日本は好きですし、日本文化は好きですけれども、限界がありますから。ですけど日本に住むこと

は楽しいですね。

### 言葉について

深田 いま言葉のむずかしさというのが出ましたけれども、バーグランド先生なんか、しゃれでも何でもよくわかるというお話をおうかがいしました。このなかでいちばん日本の生活が短いわけですが、これだけ日本語をこなされて、日本語という言葉をどういうふうにお考えですか。タッカー先生のように日本語をこなしてらしても、肝心なところがどうしてもわからないことがあるというようにな点から、どういうふうにお思いですか。

バーグランド ほかの方とちがって、ぼくは日本に来て短いです。全く日本とちがう——ダコタといたらだいたい本州と同じ面積で、人口が六〇万人ちょっとですから、京都市の約三分の一ぐらいです。ぼくはよく生徒に言いますけど、東京へ着いて新宿駅へ行ったんです。そこで約一時間で、二十までの生活のなかで会った人間と同じぐらいの数の人間に会ったんです(笑)。

アメリカ人というのは、理屈がわからないと納得しない面があると思うのです。言葉を

勉強しても、同じ大学生同志でぼくと一緒に日本にきた学生さんが、「は」と「が」の違いについて、理屈がわからないと日本語を使えない。ぼくは全然考えずに、たぶんダコタの人間だから——ダコタというのはね、人があまりしゃべらないんです。

ケリー 寒いから。

タッカー ノースダコタ？

バーグランド サウスダコタです。サウスダコタの人間というのは、三世代ぐらいまでは、あの人は東のほうから来た人だからダコタの生活や習慣がわからない。また、ニューヨークから来た人の子供の子供の代まで、「あの人はヘビのことわからん。」と言う。で、そういう理屈を通さないところで大きくなったの私は日本に来たとき、日本人のまねをしつらよと思った。ぼくは日本人はまねがうはずないから、日本人のまねしたらいいと思って、冗談でも、子供は初めておもしろいこと聞いたら、周りの人が笑うから笑う。べつに自分がわかる、わからないのじゃなしに笑う。冗談というのは聞いている人の予想と結果にずれがあつて、落ちがあつて、ちがう結果が出るんです。こうであるべきな



深田未来生氏

のに、ちがったふうになったというのがおもしろいのです。冗談というのは、それがわからなくても環境から笑う。周りの人が笑っているから自分も笑う。ぼくもべつにわからなくても笑うことから始まって、だんだんんで笑っているのかわかってきた。

だから最初日本に来たら、だれでも電話できると、思っていた。電話を見たら、「もしもし、はい、はい、はいはい、はい、はい、さようなら」。(笑) これだったらだれでもできる、ぼくでもできると。でもやはり、その「はい」の入れている場所が大切です。言葉がわからなくても、「はい」を入れる場所が合ったら、あ、あの人は日本語がわかっていると皆が思う。

七年ぐらいつき合ってる友達が、本当には

くがわからないうちがやっとならなってきた。ぼくはいつでも「はい、はい」と言いますからね、何かきかれて質問のなかの一つの言葉がわからなくても、想像力というのかな、たぶんこうやと思ってるんです。ときどきそれが全然ちがった意味でむこうは使っているから、質問と答えが全然関係のないものになる。その友達は、「あなたは言葉がわかっているときは考える。言葉がわかっているときはすぐ返事をする」と言います(笑)。

ほかの人も同じ経験があると思いますけど、「英語で考えますか、日本語でしゃべっているときは日本語で考えますか」と。ぼくは考えることというのは言葉使わないと思うんです。いましゃべっているけれども、頭の中ではあまり考えていないんです。言葉というののもっと自転車に乗ることとか、走るのととか、食えることに近いんです。筋肉の訓練ですね。口を動かしたら、自動的に言葉が下りてくるんです。べつに考えて、言葉を並べてそのまま出すのじゃないに、肉体的な訓練をした口が自動的に動くような気がするんです。

だから、言葉の深さというのかな、そこで

ぼくはわからなくなるんです。日常会話のなかでの冗談はわかります。漫才もだいたいわかります。でももっとむずかしい話になると、たとえば一生に一度しか使わないような言葉があるんですね。むずかしい言葉いうたら、ほんとに使う機会が少ない。それと毎日、何十回も使う言葉があるんです。この一生に一度ぐらしか使わない言葉というのは、ぼくはあまりたくさん持ってないんです。まねして言葉使ってますから、日本人がよく使う言葉はわかる。あまり使わない言葉はわからない。その点では英語のほうがやりやすいと思います。すごくむずかしい専門用語を除いたら、あまりむずかしい言葉はないと思うんです。むずかしいというか、一生一度しか使わないような言葉があまりないと思うんです。たとえば結婚式しか使わない言葉とか、卒業式しか使わない言葉とか、会社に入ったときしか使わない言葉とか、それが英語にはあまりないんですね。

日本語になると、たとえば「座談会」という言葉は、ぼくはこの手紙をもらって初めて聞いたんです。日本に来て初めて座談会に出ているから。座談会ってどういう意味ですか

と。漢字を見たらね、ぼくはあまり漢字わかりませんですけど、最初のやつは座席の、座ることですね。で雑談でよく言うから、それに近いようなこととちがうかな、座ってしゃべるのとちがうかなと思って、ちょっとわかったような気がしたんです。「座談会」というのは来て一一年で初めて聞いたんです。そのような言葉というのは非常にわかりにくいと思うんです。

ウィリアムズ 漢字の関係でいろんな言葉をつくるんですね。同じ漢字でもニュアンスはもう……英語で一つの言葉が、日本語ではいっぱいあるのじゃないですか。

深田 結局、日本語というのは相手によりけりとか、状況によってというふうに、使い分けが英語に比べて複雑な面があるのじゃないですかね。ですから本当に日本語をこなすということは、複雑な日本の人間関係というものをごこなさないと使い分けることがむずかしい。それから主語が非常にあいまいですから、「私」とか、「あなた」という言葉を全然使わなくても何時間も話すことができるけれども、英語の場合、「私」とか「あなた」という言葉を使わないで一分とか二分でも話が

もたないという面がありますよね。そういう言葉としての日本語と英語の差というものがあるといって、皆さんほかに何か感想がないでしょうか。

ケリー なんぼでもあるけれど。これで一生悩まされているんだから(笑)。

タッカー 言葉はやはりいちばんむずかしい問題だと思いますね。

ウィリアムズ 英語にはそんなにたくさん、いろいろなニュアンスはないんじゃないですか。

タッカー 言葉と文化は非常に密接な関係があることは重要ですね。たとえば、アメリカの場合は英語はべつに完全に話せなくてもアメリカの文化に溶け込むことができます。もちろん大切ですが、しかし非常に下手な英語をしゃべっても、りっぱなアメリカ人になることができる人もたくさんいますから。

ケリー 日本語は相手にうなずかして、うんうんと言わせながら放送する言葉なんですね。最近年を取ってきたせいか、意地悪はあまりしないことにしているけれど、昔ね、ち

よっと実験的にやってみたことがあるんです。学生がぜひ相談したいことがあると言って、どこか喫茶店へ行って一対一で聞いてあげることにした。で、ただ英語式に顔を見てじっと聞いてあげると、二分間も続かないのね。「先生、なにか忙しいんですか」、つまり英語式にフル・アテンションを与えて、いちばん真面目な態度でやったらだめなんです。うーん、そうか。うーん、ふーんとかうやうやしてこそ、むこうがどどん言ってくるのでね。黙って聞いてやって、笑うところだけ笑ってやっていると、ほんとにきこえない冷たい変なおっさんだということになってしまってますね。

さきほど電話の話が出ましたけれど、最初同志社に来たころ、電話の状況は三〇年前は非常に悪かった。つまり戦争でやられてしまっているから。いまは日本の電話の状況は世界一じゃないかと思うぐらい、いいですけれどね。稚内としゃべっているのか、上京区としゃべっているのか、全然同じでしょう。ただあのころは大変だったんですよ。下京区までだけでも大声でやっとなきゃならなかったんです。そして雑音も入るし……。それが焼

けなかった京都でもそうだったでしょう。  
タッカー「はいはい、もしもし」って何  
回もやってね。

ケリー いまごろの電話でもね、「は、は、  
はい、え、え、承知承知、はい、はい、どう  
も」という(笑)。これがあのころの病気かと  
思ったんです。

ウィリアムズ そうかもしれません(笑)。  
ケリー だけど、そうじゃないんですね。

この前、友人を、ドル替えなきゃならないか  
らおまえの銀行に連れて行けということ、  
銀行に連れて行っただけです。それで一〇分  
ぐらい待たなきゃならなかった。そしたらむ  
こうで電話しているんですよ。「あれ何だ」  
ってぼくに聞くんです。アメリカ人がです  
よ。「電話しているんだ」「いや電話してるん  
だけど、なんであんな、は、は、え、え、  
え、あ、あ、(笑)」「いや、あれしなきゃ電話  
の相手は話してくれないんだ。おまけにね、  
最後に置くときにちゃんとおじぎしている。  
上司としゃべっていたからかね。」「おう、そ  
うか」ということで、そこで一回り、その彼に  
上等な日本文化講座をしてあげたわけ(笑)。  
日本語というのはそういうふうにならずがし

て、なお言う、なお言うというようなもので  
す。

しかもNHKに以前頼まれて、ラジオの朝  
の時間に五回続けて一五分ずつしゃべって  
れと言われて、一生懸命メモをつくって行っ  
たわけなんです。京都で吹き込んでいいから  
というのでね。で、行って、アナウンサーが  
「けさの講師は同志社大学のケリー先生でござ  
います」ということで、彼はそっと逃げて  
しまう。私とマイクだけで、窓の裏でヘッド  
ホンをつけてた週刊誌を読んでいるエンジニ  
アがおったわけだけど、できないんですよ、マ  
イクと一人では。英語ではできるのですよ。  
で途中でやめて、アナウンサーにもう一度来  
てもらって、あなたそこにおつてくださいと  
言って、NHK聴取者全部を代表してもらっ  
て、そしてマイクと彼とを相手に話できまし  
たね。一人ではできないんですよ、日本語  
は。深田さんもそう思いませんか。

深田 でも英語でも同じじゃないかと思  
いますけどね。やはり相手がいないと会話とい  
うのは成り立たないわけですから。ただ日本  
語ははっきりとした主語がない言葉として、  
そのかわり相手というものを前提としている

というか、相手がいれば言葉が成り立っている  
ということがあるかもしれませんね。

バーグラント 喫茶店のさっきの学生さん  
の話ですけど、私がアメリカへ遊びに帰っ  
て、一カ月から二カ月ぐらいアメリカにおつた  
ら、日本に戻ってきたとき、電話の英語の癖  
がつかから、「もしもし」とむこうがしゃべ  
る、こっちは何も言わない。やっぱりすぐ、  
「聞こえますかッ」とこうやる(笑)。「はい、  
はい、はい」を言わないと、わかっているか、  
わかっているか、わからないんですよ。英語  
になるとずーっとしゃべって、相手がずーっ  
と聞いて、だから英語で電話に出ている人を見  
ると、じっと座っただけです。日本人は  
目上の人と電話で話しているときは、最後に  
なると「あ、どうも」と、ちゃんと頭を下げ  
てしゃべるんですよ。だから電話でも、深田  
先生がさっき言ったように、相手を前提とし  
てしゃべるから、相手がいなかったら、しゃ  
べりにくい。

落語でもね、アメリカのコメディアンみた  
いな一〇分、一五分ひとりでしゃべる、あれ  
を考えていましたけれど、落語のなかでの対  
話が多いんです。一人の人が、二人の役をす

るんです。ひとりは座って、ずうっとしゃべることがあることはあるけれど、対話的な落語が多い。だから、ひとりですつとしゃべるのがあまり日本語にないんじゃないですか。

深田 いまお聞きしていると、日本語というのは相手を前提として対話的な要素を内に秘めている。ところが言葉はそういう要素をもっている、日本人というのはけっして外国人のように対話は上手じゃないですね。それはやはり、相手がだれであるかとか、相手の身分とか、置かれている場とかいうものによって、対話が成り立つはずの二人の間、あるいは複数の人間の間にいろんなダイナミックスというものが入ってきて、そして対話そのものを規制するというコントロールします。ですからなかなか日本人の間に、いまおっしゃったような対話の要素という言葉のなかにありながら、本当の対話というのが成り立たないというむずかしさはあると思うんですね。

タッカー先生など、さつき、とことんまで行ったときにどうしても言葉としてつかめないうようなむずかしさが日本語のなかにある、とおっしゃったんですけども、そうい

うのをどうやったら克服できるとお思いですか。

タッカー もう少し勉強したらいいですが、ぼくはあまり勉強しなかったんです。いまは英米文学を教えますから、それほど日本語を勉強する暇がないし、日本語の本をほとんど読みません。英語の本、たくさん読まなきゃなりませんから、日本語の本とか雑誌、新聞、ほとんど読みませんね。ですからそれが非常に大きなハンディキャップです。だからぼくは言葉のハンディキャップは克服することができないと思います。ずっと二〇年前から勉強しましたらもう少し上手になって、そしてやはりたくさん本とか雑誌を読まない日本人の考え方をよくつかむことできないと思います。それは大きなマイナスですね。ですからこれはぼくの不勉強の点が多いんじゃないですか。

#### 日本人とことば

バーグラント この座談会が日本人の集まりだったらね。ときどきあるんですが、何々の会議が。若い者はしゃべれないんですね。目上の人がしゃべるから、自分は出られない。

い。しかしここは外人同士ですから、ぼくは自由にしゃべる気持ちになってしゃべるのですけれど、日本人の集まりだったら、自分それなりに上へ行く年数がなかったらしゃべる権利がないというふう思う。さつき深田先生が言われたように、状況が非常に大切だと思うのです。

ウィリアムズ このあいだ日本人の友人、有名な方で英語ペラペラですけれども、バンクの国際会議に出たんです。もちろん東南アジアの方々が多かったですけれども、本人は英語があんなに上手ですし、アメリカにも昔何年間か留学しましたけれども、日本人はそういう国際会議でほんとに考えをまとめて話すことがむずかしい、というのです。自分でもできないと本人わかっていたんです。ほかのマレーシアの方とかフィリピンの方が、英語は下手でも考えを言いますね。日本人は教師から学生への一方的の教育が多いからしたら、自分が何を考えているかを表現することが必しも上手ではありません。だからしばしば自分が恥ずかしくて対話ができない。私もいま大学のほうで「英語演説法」を教えています。しかし演説するよりもディスカ

ツシヨンのやり方、「あなたはどう思いますか」という質問に答えたり、みんなの言うことを聞いてまとめるとか、やはりこれからはそういうことを教えるほうが大切じゃないんですか。英語を教える目的は、いまの若い日本人は、英語はアメリカ人、ヨーロッパの人と話し合うためと考えるのですけど、私の心の底のところは、やはり近いアジアの国々の人たちとの話し合いの力を育ててほしいですね。そういう国際会議に出て日本人の意見を出すことが大切です。スリーピング、スマイリング、サイレントでなく……(笑)。

深田 日本人の場合にはメンツとか恥とかいうような要素があつて、まともものを言えなかつたら言わないほうがましだというような形で、国際的な場においても発言が少なくなるというか、そういうことがあるのじゃないかと思ひますけど。ですからいまおっしゃつたように国際的な状況に行つた場合に日本人がなかなか発言しないというのは言葉の問題だけじゃなくて、もう少し内容的なことにも価値観の差があつて、積極的に参加できないということがあるのじゃないかと思ひますね。

バーグラント 価値観の違いというのは、

ときどきアメリカから友達が出来たら、うちではだいたい日本語でしゃべっているのですけれど、英語でしゃべる。英語でしゃべるととくにアメリカ人というのは、けんかじゃないんですけど議論になつて、自分の立場と相手の立場があつて勝つことが大切です。言葉で勝つ。たとえば日本の貿易についてどう思いますかと。こつちがチャチャチャ言つて、むこうがチャチャチャ言つて、あとで、あ、きようは自分が勝つたと。言葉のなかで議論して、よくしゃべるほうと論理の通るほうが勝つ。でも日本語になると、逆にしゃべるほうが負ける。しゃべらないほうがふんふんふん言つていても、そのふんふん言つている態度がね、もうあなたの意見は、そんなあほらしい意見は全然受け入れないと、黙つても黙つたほうが勝つという気がします。自分のまごつた意見を持っていても必ずしゃべるとはかぎりませんから、まごつた意見を持つていてもしゃべらない場合がよくあるんじゃないですか。相手がまごつているとわかつていてもですね。

たとえば日本人はよく、気を遣う、と言う

んです。うちの家内の友達、日本人ですけど遊びにきて三泊ぐらい泊まつたんです。うちは同志社高校の寮ですから、だいたい家具とか食器とか全部そろつてましたから、結婚したときにあまり新しいものは買わなかつたのですが、一〇年前に五〇〇〇円のテフロンのフライパンを買つたんです。その友達とこののは大金持ちの娘さんで、お皿洗つたところのフライパンを、ごしごし金属たわしで洗つたんです。傷がつくんです。うちの家内がその横におつたんです。一言も注意を言わない。それでテフロンがだめになつてしまつたのです。ぼくはそれをあとで聞いてね、「なんで注意しなかつたか」「いや友達が、あ、悪いことしたなと思う。だから言わなかつた」と。ぼくはアメリカ人として考えたらね、あとでその友達がわかつたら、もつと気を悪くする。注意されなくて、あとではかのところから、「あんたフライパンだめにしましたね」と聞いたらもつと気を悪くする。なんでそれぐらい気を遣うのか。

やはり日本人というのは、あとを考えずにその場でなかなか言えない。人に傷がつくよ

うなことは言えない。

## 日本人と人間関係

深田 いま言葉の問題から、人間関係の枠組みのような話になってますけれども、いまの話も結局人間と人間の調和というか、ハーモニーを維持するためにいろんな面で妥協する。だから相手の気持ちを傷つけないためには言うべきことも言わない。それでハーモニーを保っていく。そのハーモニーというのが日本の社会構造のなかですごく大事だと思ってるんです。そのためには、普通大事だと思ってることも犠牲にしてもハーモニーを保つ。それが外国人の場合にはなかなか理解できないという面があるんじゃないかと思うんです。そういう人間関係のむずかしさというか、その辺はどうでしょうか。

ケリー 私も長年同志社とアームストの間にとろうとして——アームストのほうで新島スカラシップとか、内村スカラシップがあるわけなんです。アームスト・カレッジは小さな大学ですわね。いまでも一五〇〇人、二〇年前は一〇〇〇人ぐらい。で、いろいろ考えてみるのでは、りっぱな榊原先生とか藤

倉先生などが行ったわけですけど、アームスト・カレッジのような大きさのところで理想的な日本人の数は二人なんです。三人になるとね——もつといま五、六人おられますけど——日本の社会ができてしまうのです。二人は日本の社会にならないのです。三人ができると、AとBが会うときにはCの話をすると、BとCが会うときにはAの話をすると、AとCが会うときにBの話をすると。べつにそれは悪口とかいうことじゃないんです。ただそういう具合になっている。それでまた三人とも一緒に集まったり、ときどきめし食ったりする。二人だけだったら、AはBの話しかできないわけだ。つまり社会にならないんです。

で、一たんああいう小さいところで日本社会ができてしまうと、アメリカ社会に対するひとつの壁ができるわけだ。つまり忙しくなっちゃうんですよ、それだけをちゃんと維持していくのに。二人だけだったら維持する必要がないのです。ただ一対一なんで、それから他のアメリカ人とでも一対一なんで、それから、そしてら本当のアメリカ社会に溶け込むために行っているのだから、勉強のためにも行っているんだけど、できるだけむこう

のものを把握してもらいたいものですから。やはり、一たん日本の社会ができてしまつとね、これはちょっと忙しくなりますし、恐ろしいものですよ……と思いませんか。

深田 小さい規模でも内側と外側ができたから、こんどはそれがなかなか崩れないというか、そういう傾向が日本人のなかにある。あるいは日本の社会構造のなかにも組み込まれたような形である。メンタリティーのなかにもそれがあるということでしょうね。

ウィリアムズ ここでは人間関係が非常に大事ですね。私が「家族関係」を教えるよう頼まれたとき、アメリカの大学にそういう講座があるかしらと考えました。アメリカの大学では、「結婚の準備」(プレパレーション・フォー・マリッジ)とか、マリッジ・オリエンテーションとかいっています。「家族社会学」というのもあります。日本の場合は人間関係、家族関係が言葉のなかにも非常に大切なものとしてあるでしょう、お兄さんとか弟とか。英語では全然考えません、ブラザー、シスターだけです。日本語にはそういう言葉がいっぱいあります。先輩・後輩とか、だれが上、だれが下とか……。英語ではニュアン

ス変えてないんです、ほんとに相手の身分をよく考えるということ、日本人はいいところがあるといます。よい点はあるんですけど、批判するのじゃないけど、上下関係の重要さというか……。

アメリカ人は、知らない人々のなかに平気で入るんです。日本人はなかなかそんなわけにいきません。もちろん西洋はカプトル単位ですね。日本では知らない人同士が出会ったとき、なかなか紹介し合いません。われわれはほんとに気楽で、国が大きいからか、キリスト教の背景があるからでしょうか。こちらは島国ですから、ちがうのかも知れません。わかりませんが……。

バーグランド 外人に対してある意味では壁があっても、日本人になりきれないところがあっても、外人を受け入れるところへはいれたら、自由はなくても、すぐく落ち着くというのかな、安心する。たとえば同志社財閥のなかで守られているという気持ちがあるものすごく強いです。ほくにとっては何かがあったら、同志社という組織じゃなしに、同志社という毎日の一緒に仕事している同僚が、校長先生初め、みんながほくを守ってくれると

いう気持ちがあるものすごく強い。だから日本社会に少し入ると安心感といいますか、それが強いんです。

ほくは祇園のほうによく飲みに行きますけれども、観光客で来ている人はそういう場所がやはり怖いんですね。ビール一本飲んで四万円とか、そういうところへ入ったら困るから、どこへ入ったらいいのかわからない。ほくは同じ五軒とか一〇軒ぐらいのところに入らずと出入りして、安心してのめます。むこうもほくの顔を知っているから、ちゃんと請求したら払ってくれると知っています。日本の社会のなかでもはいれるところまで入ったら、外人でも安心する。だから自由がなくなつたかわりに落ち着いた安心感ができた、そういうように思うんです、人間関係のなかで。

深田 これは中根千枝さんなんかの論理のなかにもありますけれども、やはり自分の場というものを持つと安定する。いまおっしゃったように安心する。ところがそれはなかなか確立しないというか、日本の場合にはその場を持つまでがすごく時間がかかる。だから同志社のなかにおいても、同志社のなかにおけ

る場というものがあるので、それが確立するまではなにか非常に不安定な立場にあって、一たん場を持つと発言力もふえるし、自分としても安心できる。それが外国人の場合にはなかなかその場をほかの人と平等の形で持つことができにくい。ただそれは、たとえば日本外のことを考えた場合に、アメリカなんかにしてもどうでしょうね。場というようになことに関して、アメリカの場合にはどうなんだろう。さっきバーグランド先生は、私はいちばん若いけれどもきょうはしゃべっているとおっしゃいましたけれども、同じようなことがアメリカについて言えるのか言えないのかというようなことがあると思うのです。どうでしょうね。

タッカー アメリカはもつと自由でしょうね。だれでも何でも言うことが、それは権威あるというふうに見える。日本はやはり自分の立場から言わなければならぬでしょう。人間関係がもつと大切でしょうし、自分の場が大切です。私たちは同志社の場がありますからなりに安定していますけど、しかしたいの日本に滞在する外国人はそういうようにはっきりした場はないですから、もつ

と不安な面もあるのじゃないですか。

バーグランド 『普通の人々』ですか、映画見てませんか、きのう本を読み終えたんですが、家族のなかでも場がないという印象だったんです。お母さんは何を考えているかしら、お父さんは何を考えているかしら、お父さんとお母さんの離婚になりそうなところどれぐらい自分が入ったらいいのかしらと主人公の子供が迷っていた。ほくはアメリカへ帰るとすごく疲れるのです。アメリカ人というのはすごく考えるのです。たとえば、うちの弟のところへ、この前の夏休みに食事によばれたんです。うちの子供は三人連れて行って、むこうは女の子二人です。おとな四人と子供五人で食事したんです。むこうのいちゃん下の子が、野菜食べたくないと言いました。お父さんとお母さんは、二〇分ぐらい議論したんです。「きょうは友達が出来ているから、食べさせなくてもいいのかしら」、「やはり野菜を食べないといかんけれど、きょうは興奮しているからやめとこか」、「いや、やっぱり食べさせないといかん」と……。それでぼくはものすごく疲れた。

ケリー ご飯おいしくなくなるね。

バーグランド 場がないというのかな、毎日毎日、家族のなかでも、自分がこれぐらい言えないとお父さんとしての席がない、お母さんとしての席がない、子供としての場がない。だから毎日毎日、関係が変わるのですね。

日本の家庭を見ると、ぼくは悪い癖かどうか知りませんが、日本人の男性としてのいいところをとって、悪いところを捨ててという主義ですから、子供をお母さんが育てているという教育方針がね、お父さんとしての場がはっきりしているんです。ものすごく悪いことしたら「お父さん叱りなさい」と、そういうときの叱る役ですね。あとは電話かかってきても——たとえばうちの子供は、お習字習っているのですが、父であるぼくは全然、かばんがどこにあるか、どこまで何時に、何曜日に行っているのかわかりません。アメリカだったらお父さんもそれ知るべきだと、お父さんもお母さんも同じ家のなかのことを全部やらないとだめです。

うちの弟は、家事にしても半分半分に割るのです。月曜日奥さんがお皿洗う、火曜日は弟の番、全部半分半分。でもその半分半分

に割り切ってやっつけても——ぼくは料理は五年に一べんぐらいしかやりませんけれども、きれいな好きやからあまり散らかさない。野菜を切ったらまな板をちゃんと拭いてもとの場所に戻す。うちの家内は毎日やっているからと思いますけど、チャチャチャ、ポンポンとあと片づけが大変だ。早くやるかわりにあまり丁寧にはやらないんです。でも、うちの弟がぼくに言うのですが、半分半分に割っても、半分半分に出来ないから、どこまでがぼくの半分やと。月曜日のほうがお皿の数が多くて、火曜日のほうが少なかったら、お皿の数までいくのか。自分で考えながら、つねに議論しながら生活する。それは日本にはないと思うのですね。

だから場がはっきりしているというのは、言葉で議論したうえで場がはっきりしているのじゃなしに、自然……と言ったらウーマンリブの人に怒られるけど、自然の形になって場がある。たとえば奥さんも旦那さんも働いていて、ある程度旦那さんが手伝わなかったらやっていけない状況になったら、うちの女の先生が水曜日が会議ですから、水曜日に旦那さんが保育園に子供を迎えに行く、そうい

う自然の形なんです。議論したうえで、あなたのお仕事はこうや、私のはこうやというのはちがって、自然の家族のなかでの関係で自分の場を持つ。ぼくは、日本の家庭のほうはずっと落ち着いているように思っています。

### 日本人とデモクラシー

深田 その自然な形でというのがね、いまおっしゃったように議論抜き……論理抜きということになりますね。このことを考えると、いわゆるデモクラシーということが日本の場合にはほんとにむずかしいと思うのです。自然の成り行きに任ずるか、議論をしない。日本人は根本的に議論は下手だと思います。自分の論理というものを持ち出して、相手の論理と闘わして、その結果として納得のいく関係を持つとか場を持つとかいうのじゃなくて、自然の成り行きのようなものに任ずると日本人の傾向があると、デモクラシーというような、自分の主体性というものを持って、そして相手の主体性とかかわらせていくなから生まれてくるものは、日本の場合にはむずかしいのじゃないかと思うのです。これはたいへんむずかしい倫理の話

なんかにもなりますが、いままで皆さんにいろいろお話しただいたなかで、日本と西欧のメンタリティーの差とか、あるいは人間関係の違いとかいうものなから、民主主義、デモクラシーというものが日本で成り立つか、成り立たないのか、皆さんどういうようにお思いになっているかおうかがいしたいと思っています。

バーグランド 国として考えると、デモクラシーのいちばん大切なものは情報といえるかな、インフォメーションの広がり具合というんですかな。このあいだ英字新聞で読みましたけれど、アメリカで大統領の名前を知らない人が二〇人に一人とかいう話ですね。学校に通ってない、ハーレムのなかに住んでいる黒人とか、田舎の農夫で新聞も取ってない、テレビも見ない、そういう人に情報が入らないような社会のなかでは民主主義は成り立たないというのかな。で、日本は世界一じゃないですか、国全体に情報が流れる。週刊誌、新聞、テレビ……。その一つの意味では日本はデモクラシーになりやすい社会だと思えます。ただ情報が一方的に入るだけだめだと思えます。

ぼくらの大学の先生が、デモクラシーというのは自分の意見を述べる権利があるのでなしに、自分の意見を述べなければならぬ義務がある。権利でなしに義務だ。その意味では日本人というのは一方的に情報を入れるんですけれど、なかなかこっちのほうから自分のまとまった意見を述べない。

ウィリアムズ いまの学生は、社会問題についてほとんど意見を言おうとしません。

深田 ほんとに考えてないでしょうか。現代の学生は、社会に対しての自分の考えというものを持ってないと言えてしまうか。

ウィリアムズ すごく無関心らしいんです。「演説法」の授業の話題を出すとき、日本語でもできないと言っています。もちろん学校のなかの紛争のことなどもノータッチ。

深田 いまバーグランド先生がおっしゃったのは、情報に関しては日本は世界一である。そしてデモクラシーに関しては、情報が十分にみんなに行き渡ってるか渡ってないかということが非常に左右する。その面においては日本にはデモクラシーになりやすい土壌がある。それなのにどうして日本にはデモクラシーがなかなか確立しないのかということ

で、ミセス・ウィリアムズは、対社会的に主体的にかかわるということが日本人は上手じゃないというふうにおっしゃったんですけどね。個人的なレベルではどうなんでしょう。

日本人は社会というような大きな組織じゃなくて、個人個人とのつながり合いの場合には、ずいぶん礼儀作法を含めて丁寧にかかわるといふ面があると思うのですが、少し規模が大きくなった人間の間係になってくると、それが上手じゃないというようなことが言えるのじゃないかと思うのです。

バーグランド アメリカでは選挙になると昔ではデモクラットならデモクラット、リパブリッカンならリパブリッカンで、何々党であってその何々党の人を入れる。また長い名前とか、変わった名前とか、全然政治的な問題は関係なしに投票するのが多いと思いますよ。日本で民主主義から根ざしたものでなく、選挙前になると、特定の政治団体に入っている人が近所を全部回ってよろしくお願ひしますと頼みに来ます。また自民党の人と深い関係を持ったどこそこの幼稚園の先生が回って、自民党をよろしくお願ひします。また共産党の人が、何人かの赤旗を売っていると

ころへ行行って、よろしくお願ひします、三人か四人ぐらいに頼まれて、そのなかで、ああ、ことしはこの人にほんとに世話になりましたから、ことしはこの党に入れましょうと。それは本当の民主主義でありませんけれど、そのほうが、アメリカ式のいちばん長い名前とか、いちばん変わった名前よりもいいんではないかと思ひます。

深田 いわゆる義理人情が非常に大切であって、人間と人間との関係というものをつないでゆくために義理と人情というものが作用する。アメリカなどの興味本位な政治のほうがよりも、そのほうがまだましだとおっしゃるわけですか。

ケリー でも、はたしてそれが民主主義的かどうかということなんだね。日本人は非常に便利にできているんですわ。個人であり得るし、組織のなかの人でもあり得るし、二重人格を持っているのですよ。個人で云々と思つてしまつたら、ひよろつと次のときには組織のなかの人なんです。組織で、なにも共産党という意味じゃないんですけど、自分の場かというのをだいたい上手に組み分けしない

と、とんでもない間違ひするんですよ。その辺が、少なくとも西洋でいう民主主義といふものの邪魔になるのじゃないでしょうかね。

バーグランド アメリカもそうじゃないですか。ただアメリカの組織というのは、会社とか労働組合とちがつてね、鯨を大切にしましょうとか、自然を大切にしましょうとか、女の権利をもっと大事にしましょうとか、政治的な問題に対する一つの考え方を持った組織のなかに入るのじゃないですか。

ケリー それはたくさんあるでしょう、アメリカの場合は。日本の場合には、まあ二、三あるかもわからないけれど、だいたい一つですね。そのボタンさえ押せば、もうそこに落ちるわけですよ。

これ少し離れるかもわかりませんけれど、ケリー家は非常に評判悪いんです。連絡が悪いというので。同志社のご真ん中に住ましてもらつて、うちの子供はもうみんな散つてしまつて、もう二人だけで話にならないだけれど、四人おつたりしてたころに、私が知っていることが子供は知らない、子供が知っていることは私が知らない、家内が知っていることは私が知らない、私の知っていることは

家内が知らないのですね。とにかく、ケリーの  
だれかに言えば、ケリー家がそれを知ってな  
きゃならないとおつき合いにならないです  
ね。だけれどみんなばらばらでね、なんとあ

そこは連絡が悪い家だろうと、もう近ごろは  
しかたないふうにみられてしまっているの  
でしょうけど。もう二人だけだが、私は依然  
としてばらばらなんです。それで叱られる  
し、不便だと言われる。なんと都合悪い家な  
んだろうかと。だけれど関係あればもちろん  
話すけれど、関係ないことは言わないわけ  
なんだね。そういう意味で日本社会には落第生  
になっちゃってるんだな、ぼくら、家として  
は。

深田 そうでしょうか。日本の家庭でも、  
いまおっしゃっているようなインフォーマー  
ションという情報というものは、お父さん  
ならお父さんが持っている。で必要なとき  
はお父さんから情報が伝達されるというふう  
な形で、家庭内において情報が十分にみんな  
に共通して行き渡っているとは言えないのじ  
やないですかね。だからある面から言ったら  
ケリー先生の家のほうが非常に日本の場合に  
というかな。アメリカの家庭なんかの場合に

は、もっと共通したインフォメーションを  
みんなを持って生活していくということを大  
事にする、価値観としてそういうものを重要  
視する傾向があるのじゃないですかね。

ケリー しかし、それを裏返してゆくと、  
そういうことで一つの共通のものがあるわけ  
だね、子供に至るまで。だけれど日本の家庭  
では、お母さんは子供のすべてのことを、い  
ざとなったらお父さんに叱られないように全  
部引き出して知って、それから主人さんが  
帰ってくると、そっちのことも全部引き出し  
てですね、とにかくインフォメーション交  
通調査の役割りができてなきやどうにもなら  
ないわけなんです。そこでワンセットとい  
うか、一つの単位に守っていかなきや外に顔  
が立たぬということなんです。その意味で  
はアメリカというのか、西洋というのか、ば  
らばらなんです。だからその共通性からく  
る一つの力もあるでしょうけれど、それが民  
主主義ともつながると思うのですけれどね。  
日本式はだからつながらないと私は言わない  
けれど、いくらかそこでね、それぞれが先  
んとなつてるところに、その家庭のほうが一  
にくるといふところがあるのじゃないかな。

深田 日本の文化というものが、内と外と  
いうのが非常にはっきりしていて、おのおの  
その場において自分をそこにかかわらしてい  
くというむずかしさがあった、それがとくに  
外国人にとってはむずかしい課題であるとい  
うふうなことがお話のなかにあったと思うの  
です。しかし日本には日本独特の文化のユニ  
ークさというものがあって、そのなかのよ  
さ、悪さというものがなかなか日本人には見  
えないときに、外国から来た人のほうがそれ  
を見きわめやすいということがわかってきた  
と思うんです。そしてとくにデモクラシーの  
問題に関しても、けっしてデモクラシーとい  
うものが日本において不毛ではない、日本に  
は日本なりのデモクラシーの確立の可能性と  
いうものがあるのじゃないかというお話もあ  
りました。そういうようなことを念頭に置い  
て、これからも皆さんの日本人観あるいは日  
本文化観というものを展開していただきたい  
と思います。

(一九八一年十二月二十一日収録 於、同志社有終  
館担当理事室)